Love God and Serve His People
聖学院大学

自分たちの活動がこれからの世界の目標につながっていることを知る意義

「神を仰ぎ人に仕う」をスクールモットーに掲げ、その教育方針として「一人を愛し、一人を育む。」をキーワードにしている聖学院大学は、開学当初から徹底した少人数教育を行い、面倒見の良い大学として知られている。1903年に設立された聖学院神学校の創立から数えて、2023年で120周年を迎える聖学院はその節目までの5年間における聖学院ビジョンを作成し、その中核にSDGsを据えている。2018年には学校法人としてグローバル・コンパクトに署名・加入し、学院全体においてもSDGs達成を目指した活動が盛んだ。「知の共同体」である大学でSDGsが教育において、さらに課外活動などでどのように捉えられ、どのような活動が展開されているのか。プロジェクトに関わる教職員の方々に聞いた。

SDGsへの取り組みとそれぞれの役割について

—聖学院大学のSDGsプロジェクトの概要と、教職員の方々の関わり方、役割について教えてください。

西海　2018年にグローバル・コンパクトに加入し、2019年からSDGsに関する具体的なプロジェクトが動き出しています。現在は教職員が10名弱と小さなチームでこれからどのように進めていくかを話し合っている段階です。私の専門は平和学なので、「平和とは何か」という切り口から戦争や紛争、貧困や差別などを考えることをきっかけに、講義の中でもSDGsを取り上げ、身近な課題として触れていきたいと思っています。

若原　私は教育学を専門としており、地域社会教育論などを担当しています。主に地域をベースとして、ローカルな次元でのSDGsを考えています。持続可能な地域社会を築いていくにあたり、どのような学びが必要とされるのか、そこで教育はどのような役割を果たすのかなどを学生と共に考えています。地域と向き合い、行動することがSDGsの目標につながっていることを、講義や課外活動を通して多くの学生に気づいてもらえればと思っています。

芦澤　私はボランティア活動支援センターに所属しており、学生の社会に貢献したいという思いを具体的な活動と結びつける専門職のコーディネーターとして、一人ひとりに合った活動ができるよう支援しています。ボランティアとSDGsとはつなげて考えられる部分が多く、SDGsの理解を深められるようなワークショップやミニ講座を実施しています。

鈴木　私は主に国家間のルールを扱う国際法を専門にしています。その中でも特に環境問題を法的視点から考える国際環境法が専門です。国際環境法はSDGsの各目標に関わらない部分はないといっても過言ではないほど、深く関係しています。環境を考える際、最近はユース・エンゲージメントがトレンドの1つであり、ユースの核でもある学生たちが、国際社会でどのように活躍できるのかを一緒に模索していく予定です。

共に考え行動することで得られる気づき

—これまで行ってきた具体的なアクションについて、その内容と活動に対する学生の反応をお聞かせください。

芦澤　2019年12月に2週間ほど、「食べることで子どもたちの笑顔を増やす」ことを目的として学生食堂でSDGs寄付メニューを提供しました。これは学生食堂の売上金の一部を国連WFP（World Food Programme：世界食糧計画）に寄付する仕組みを利用した、誰でも参加できるSDGsアクションプランです。食堂寄付メニュープロジェクト学生メンバーが中心となって活動し、彼らの熱意でSDGsへの興味や理解は広がったと感じています。

西海　2020年度は新型コロナウイルスの影響により、授業が原則オンラインになりました。SDGsの活動においてもそれぞれの家からリモートで活動する方法はないかと学生にアイデアを募りました。そうして実現したのが「環境ワークショップ」としての「新聞紙ごみ箱づくり」「みつろうラップづくり」のワークショップです。どちらも学生が講師を務め、楽しく、わかりやすく伝えるための工夫やワークショップの構成を考える時間は、彼らにとって大きな糧となったはずです。

若原　新型コロナウイルスの影響で学生同士、学生と教職員とが直接会えないことは不便な面も多いですが、だからこそ生まれた工夫やオンラインの

新聞紙ごみ箱づくりワークショップに参加する学生たち

ます。何かをやりたいと強く思う気持ちを持っているにもかかわらず、それを実行に移すことができずにもどかしく感じている学生も多いと思います。教職員として、最適なタイミングで筋道を示したり、手を差し伸べたりするには何が必要か、どのようなことを知っておくべきかなどを私自身も試行錯誤していきたいと感じています。

大学がSDGsに取り組む意義とこれからの活動のあり方

——大学としてSDGsに取り組むことで、学生や地域にはどのようなメリットがあるとお考えですか。今後の活動、目標も含めて教えてください。

鈴木　大学には社会に出ていくその一歩手前の、これからを担う若い人たちが集まっています。そこで、学生の皆さんにはやりたいことをどんどん見つけて、その活動がSDGsで掲げているターゲットに、間接的にでも関わっていることに気づいてほしいと願っています。また、今はまだSDGsに興味がない人たちを、どんどん巻き込んでいけるということも、大学で取り組むことの大きな意味であると思います。

若原　大学は学生のためだけでなく、地域にも開かれた、高度な学びと研究の場です。だからこそ、そこにある資源、そこから生み出された研究の成果を地域のニーズにつなげていくことも使命であると考えています。SDGsを大学で展開することは、地域と大学の関係を深め、ともに発展していくために非常に意義のあることだと活動を通して実感しています。

芦澤　学生たちの多くはボランティアに参加していても、それを個人的でローカルな活動だと考えているようです。しかし、その活動が世界の掲げる目標につながっていることを知り、理解を深められれば、自分自身の活動や学びをより発展的に捉えることができ、視野も大きく広がっていきます。だからこそ、ボランティアとSDGsをもっと広く、有機的に結び付けていけるよう、センターとしても工夫していきたいです。

西海　地域との連携やNGO・NPOのような団体、そして企業なども巻き込んでSDGsについて取り組める場を提供することは、大学が果たすべき役割の1つです。この先は、今よりさらに学生たちの自主的な活動を促し、他大学との交流や団体、企業との連携を深めていくこと、そして大学自体がサステイナブルであることを目指してより良いモデルを提示していけたらと考えています。

University Information

聖学院大学 SEIGAKUIN UNIVERSITY

〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1

URL:https://www.seigakuin.jp

学校法人聖学院の取り組み

女子聖学院中学校・高等学校

パラ・パワーリフティング大会をリモートで応援

2021年1月30日(土)に全日本パラ・パワーリフティング国際招待選手権大会が開催され、女子聖学院中高と聖学院中高合同のパラスポーツプロジェクトはリモート応援の協力を行いました。リモート応援は、WEBの応援ページで応援者がボタンを押すことで無観客の試合会場に声援が流れる仕組みで、「ファイト!」「ガンバレ!」などの掛け声や、入退場時の歓声など、再生されるすべての音声の企画・収録を聖学院パラスポーツプロジェクトが担当しました。

識字率について考えるワークショップ

中学2年生英語の授業で、書籍「世界がもし100人の村だったら」ワークショップを実施しました。書籍の世界観をさらにクラス36人に凝縮して再現し、生徒たちは居住地、母国語などの設定を与えられ世界の人々を演じました。文字が読めない役を演じた生徒の寸劇を見て、どう思ったか、また非識字だと困ることについて考え、班ごとのディスカッションで意見を交換。授業を通してSDGsにつながる世界の貧富の差や多様性に関する課題について学びを深めました。

学校法人聖学院

第1回「SDGs コンテスト PHOTO & MOVIE」開催

“ワタシが見つけたエコロジー”をテーマとして写真・動画作品を募集しコンテストを行いました(募集期間2020年9月14日-10月14日)。聖学院各校の生徒、学生、卒業生、保護者、教職員から合計で62作品の応募があり、優秀作品8点を選出(最優秀賞1点、優秀賞2点、佳作4点、広報センター長賞1点)。選ばれた作品は、日本経済新聞社が主催する「エコプロOnline」(開催期間2020年11月25日-11月28日)他にて展示されました。

聖学院大学

身近なものからプラスチックごみの削減を

聖学院大学では、学生、教職員協働のプロジェクトとしてSDGs推進に取り組んでいます。2020年度はSDGsのゴール12「つくる責任、つかう責任」にフォーカスし、いらない新聞紙で作成する“ごみ箱づくりワークショップ” と、みつろうを布に染み込ませて作成する“みつろうラップづくりワークショップ”を開催。在宅時間が増える中、身近なものからプラスチックの削減にアプローチし、環境問題に対する関心や意識を高めました。

聖学院中学校・高等学校

ハチミツづくりを通して社会課題を考える

「聖学院みつばちプロジェクト」は2016年に生徒が社会に関われる活動を創出することを目的としてスタートしました。校舎屋上に巣箱を設置し、生徒が協力してみつばちを飼育。まだ食べられる食品が廃棄されるフードロスを解消するため、規格外で市場に出回らないリンゴや桃、バナナなどにハチミツを混ぜたジャムも製造。活動は国外にも広がり、タイの農園施設がコロナで収入が激減したことを受けて、農園のバナナを使ったジャムづくりも検討しています。

震災経験を未来への備えにつなげる授業

「あなたの住んでいる町は、誰が守るのでしょうか。」中学1年生に対する問いかけから始まった授業は、L.L.T(Learn Live Together:共に学び、共に生きるという意味の造語)です。2021年2月17日(水)には「防災」をテーマに、聖学院大学でボランティア活動をしている大学生と中学生をオンラインでつなぎ震災体験やボランティア経験を共有。ゴール11「住み続けられるまちづくりを」につながる学びを深めました。